

☆ヤングアメリカンズからもらったもの！☆

本年度も、復興教育支援事業ヤングアメリカンズ東北プロジェクトが、市内小中学校16校の児童生徒、いわき生徒会サミットの生徒を対象に実施されました。また、幼小中高141名の先生方に参加いただき教職員体験研修を実施しました。今年は2日目にショーを公開しました。

「ヤングアメリカンズ」(以下YA)は、公演活動と音楽教育活動(アウトリーチ)を活動の二本柱として、世界各国の子どもたちに「英語で体験するミュージカルワークショップ」を行っている特定非営利団体です。18~25歳の若者たちと児童生徒、教職員が、歌とダンスのショーをつくりあげています。

このプロジェクトには、

1. 参加者一人一人が他人と違った個性をもっていることを認識し、自信を獲得する。
 2. 自分と違った感じ方をしている他人の大切さを学ぶ。
 3. 感じたことをそのまま表現することの大切さを学ぶ。
 4. みんなで一つのことを真剣にやり遂げることの素晴らしさを学ぶ。
- がねらいとして定められています。



「子ども未来クラブHP」及び「ヤングアメリカンズHP」より引用

教職員研修からは、

「やりきった達成感が忘れられない研修となった」「また参加したい」「自分をもっともっと表現していこうと思った」「自分を表現し、仲間と一つの目標に向かって達成していく喜びを、子どもたちに活かしていきたい」「協力し合うこと、挑戦することの大切さを感じました」「この体験を本校でも子どもたちに体験させたい」「積極的になっている自分を感じることができた」「YAの情熱に、人間としてのすばらしさを感じ、教職に活かさなければと思った」「みんなから支えられることの喜びを感じた」「生徒達が自己表現できること、失敗を恐れずに何事にもチャレンジできること、それを支える人間関係をつくれること、に力を尽くしていきたい」「YAから、自信を持たせること、寄り添うことの大切さを学びました」のような感想が聞かれました。

みんなで大きな事を成し遂げ喜び合う姿、励ましてくれたYAと、そして、一緒に感動した仲間との絆を深める姿が見られ、一つになったショーでは、観客からの拍手が鳴り止みませんでした。終了後は、別れを惜しむ姿が随所に見られました。

YAから、自分への自信、友だちの尊さ、心を開くことの大切さ、寄り添うことの大切さ、協同の価値を学ばせていただきました。改めて、いわきの学校教育に、活かしていかなければならないと思いを強めた研修でした。



教育相談係から

子どもは、本来攻撃性を持っている存在です。その攻撃性が発散されないと、こどもたちの攻撃性は、本人の内や外に向かって不登校や暴力など様々な問題をひきおこす場合もあります。

子どもたちが落ち着いて、学習したり活動するためには、この攻撃性を発散してあげることが大切です。

この攻撃性を発散するためにどうすればよいかですが、それには思いきり運動したり、学習活動をしたりすることでの満足感を十分味わわせることです。



特別支援教育から

～『感情』と『行動』を区別する～

小学校時代からすぐキレルと言われてきた男の子。きっと小学校時代、先生から叱責や非難を受けることも多かったに違いない。その結果、二次障害として反抗的な態度をとるようになったと考えられる。中学入学後も、だれが注意しても決して受け入れようとしなかった。

この子ははじめからそうだったのだろうか？きっと、自分の気持ちをわかってもらおうと、必死で話していたこともあったにちがいない。しかし、不幸にもまるごと自分を受け止めてくれる人に出会えないまま、心を閉ざしてしまったのだろう。

ではなぜ先生たちは、大切とわかっている受容や共感をしないでここまでしてしまったのか。きっと、暴力に対して受容や共感をしたら、その『行動』までも許してしまうことになる危険だからではないだろうか。

人は自分の悔しい気持ちやイライラした気持ちを受け止めてもらえるだけで落ち着く。つまり、教師は子どもの『感情』と『行動』を区別したうえで、その子の『感情』をしっかり受け止めてあげることが大切である。まさに「なおそうとするな、わかろうとせよ」である。暴力をふるうのは、いやなことがあったときの行動のレパートリーとして暴力しかなかっただけ。今度同じような気持ちになったとき、「暴力」以外の望ましい行動のレパートリーと一緒に考え、練習していくことが大切である。



指導と評価・2013.11

「中学校における生徒指導上の問題と発達障害」
高知大学準教授 鹿嶋真弓 引用

私たち教員は、児童生徒の行動に目がいきがちです。行動の裏にある感情にこそ目を向け、受け止めてあげることの大切さを改めて感じさせられました。